

「魅力的」の一言では言い表せない。 文化が持つ複雑な構造を 意識しながら、アメリカ文化の 光と影を読み解く。

きっかけというほど大きな出来事はなかった、と山城先生は言う。「ハリウッド映画はなぜ単純に白黒をつけてしまっただろう、とか、アメリカのホームドラマに白人しか出てこないのはなぜだろう、とか、いつの頃からか引っかけかきを感じるようになって。抱いた疑問を自分なりに整理しているうち、私たちを取り巻く『文化』が複雑な構造を持っていることがわかり、関心を持つようになったのです」
そして文化研究の道へ。自らの興味と疑問に、素直に向き合ってきた先生にお話を伺った。

なぜアメリカ文化が 戦後日本に持ち込まれたのか

研究者として山城先生が選んだのは「アメリカ文化」。中でも、第二次世界大戦以降のアメリカ大衆文化を中心に据えているようだ。「アメリカは民主共和国ですが、第二次大戦以降は、もともと内包していた反民主主義や帝国主義の性格が更に複雑になってきます。建国以来、独立の精神などを基にした共通の価値観となる理念を掲げて内部統合を進めてきましたが、戦後は世界の指導者として軍事・社会面で他国への浸透を

図っていきました。ですから第二次世界大戦以降のアメリカ文化には特に、さまざまな視点から考察する面白さを感じます」

建国以来、国内統合のために掲げられてきた理念は、白人エリート支配層の保守派の考え方をコアとするもので、多くの人たちが「これぞアメリカ」ととらえる価値観になっていった。それがアメリカン・デモクラシーや自由主義である。「特徴的なのが『モノの民主主義』ともいわれるアメリカン・デモクラシーです。一般的に民主主義と言えば社会的権利の保障などがイメージさ

れると思いますが、アメリカの場合にはちよつと違う。権力者も一般人も、お金持ちも貧しい者もコーラを飲む。階級を問わずに誰もが同じものを所有し消費できる、それこそが平等で民主主義だという考え方があるんですね。」確かに自由の国アメリカらしい発想だが、客観的に見るとそれほど無邪気に受け入れられるものではない、と先生は続ける。「それが覇権主義と連動する時には、政治的な意図が内包される。例を挙げると、終戦後の日本にそういった価値観を持ち込んだのは米軍です。当初は立川を始め国内各地に基地があつたので、占領者としてのアメリカを意識しやすかった。けれど、やがて基地が沖繩に集約されることでそれが見えづらくなり、米軍が持ち込んだ価値観とそれに基づくアメリカ文化が前景化してきた。多くの日本人の憧れの対象となりましたが、そこには確かな政治的判断が存在するのです」

ソフト・パワーという概念を先生は教えてくれた。「これは後年、アメリカを代表する安全保障問題の専門家ジョセフ・ナイが提唱したもので、文化の魅力で他国を動かそうという考えです。他国の人たちがアメ



山城 雅江 (やましろ まさえ)

横浜国立大学教育学部教員養成課程英語専攻卒業。一橋大学大学院言語社会研究科修士課程修了。The Graduate School and University Center of CUNY (USA) M.A. Program in Liberal Studies 修士課程修了。一橋大学大学院言語社会研究科博士課程単位取得満期退学。博士(学術)。明治学院大学教養教育センター非常勤講師、國學院大學文学部兼任講師等を経て、2013年度より中央大学総合政策学部准教授。専門はアメリカ文化研究。

リカの理想に憧れ、アメリカが望むものと同じ結果を望むようにすることができれば、他国の人たちをアメリカが望む方向に動かすためにアメと鞭を使う必要が少なくなる、ともナイは言っています。」日本も含めた世界の諸地域で、戦略的なツールとしてアメリカ文化が使われているという側面もあるのだ。

「うらわれない」自由で大きな可能性を感じて

ここまでのお話からもわかるように、先生はただ単純にアメリカ文化が好きで、その魅力を追っているわけではない。そこに付随する社会的・政治的側面も含めてトータルに見ていくことが先生の基本的な研究姿勢である。アメリカ文化は権力との結びつきが強い、その点には常に注意を払っていたい、と言いつつも、その一方で先生はこう続ける。「それでもアメリカ文化には素晴らしい面もたくさんありますから、そ



先生の単著・共著。真ん中の単著は、1960年代に活躍したアメリカの芸術家、アンディ・ウォーホルが打ち立てた「Pop/ポップ」概念が、アメリカ内外でどのように確立されているのかを考察する力作。

れをきちんと評価したい気持ちももちろんあります」

その例として、先ほど話題になったアメリカン・デモクラシーを先生は挙げた。「ある意味、アメリカ文化とは、大衆文化/ポップ・カルチャー」なのではないかと私は捉えているのですが、その根底には「特別な知識や技能、資産は必要なく、誰もが平等に楽しめる」デモクラシー(民主性)を大切にしている風潮があると感じます。高尚な文学やアートを理解できない時、日本文化の中

にいる私たちは、勉強が足りないからと自分の責任にする傾向がある。けれど、アメリカ人は「自分にもわかるように説明しろ」と要求する。相手に説明責任があると考えらるんですね。」大衆も楽しめる文化―それは文化の質を測る際によく使われる物差しの「深い／浅い」でいえば浅いのかも知れない。しかし、その二項対立に引きずられずに独自の価値観を確立しようとする力を感じる、と先生は語る。「そんなアメリカ文化から生まれたものの中には、ともすれば固定観念に縛られがちな私たちに新たな視点を提示してくれるような、大きな力と可能性を持っているものもあります」

また、「自由さ」も大きな魅力、と先生は言う。「2001年からの約4年に及ぶニューヨーク留学が本当に貴重な経験となりました。そこはさまざまな人種や生活様式、価値観がせめぎ合う世界ではありましたが、日本文化につきまとう「普通であれ」という抑圧がなく、多様なものを許容し社会を成り立たせていく成熟さ

がありました。ニューヨークの毎日感じていた解放感、今でも私の中に鮮やかに残っています。」そして現在関心を抱いているテーマとして「プラグマティズム」があると教えてくれた。「これはアメリカ文化の中で生まれ発展した哲学で、実にアメリカらしいものです。古典的な哲学だと、例えば、神はいるか／いないか」ということをとことん追究していく。演繹法を採っているので命題が非常に重要なんです。ところがプラグマティズムは、神はいるか／いないか」は重視しない。『いたらどうなるか』を考えていくわけです。

「浅い哲学」と評されることもありませんが、とても現実的なんですね。今、原理主義によって世界中で多くの争いが起こっていますが、原理にとらわれない自由さのあるプラグマティズムに、さまざまな問題と交渉するヒントがあるのではないかという気がしています。」交錯するアメリカ文化の光と影を語りながら、先生の目はきらきらと輝いていた。

「整理できない」ものは無理に結論付けない

先生が研究の軸としてしている領域は二つある。一つはアメリカの「内」を見るもので、アメリカにおける主流文化と「アメリカニズム」の諸関係。アメリカニズムとは、先に述べたように、多くのアメリカ人が「アメリカ文化の本質」としてとらえている価値観のことである。この領域については、現代アメリカの代表的アーティスト、アンディ・ウォーホルが打ち立てた「Pop」の概念をテーマに、建国以来のアメリカの歴史と、ウォーホルが才能を發揮した1960年代という時代性がそこどのように反映されているのか、またその正体とは何かを追究している。

そしてもう一つがアメリカの「外」を見る。「アメリカニゼーション研究」。外の地域とアメリカとの諸関係や、「アメリカ化」を経験した地域の大衆文化の状況を考察している。先ほどの「ソフト・パワー」にもつながるテーマで、先生は沖縄にお

る音楽をはじめとするポピュラー・カルチャー「沖縄ポップ」を題材に研究を展開している。

先生の研究の特徴は、このようにアメリカの「内」と「外」を同時並行的に追究しながら、時に比較検証することでアメリカやその文化の姿を立体的に読み解く点だ。例えば、アンディ・ウォーホルが確立した「Pop」概念と、アメリカ文化の浸透を背景に沖縄で発展した「沖縄ポップ」は、同じ「Pop／ポップ」という響きの言葉を用いながらも異なる面を持っている。その違いはどこから生まれるのか、何をもちたのか、といったことである。

見えてくるものはとても複雑に入り組んでおり、整理し切れないところもある。けれど無理に結論付けずにそのままを提示していきたい、と先生は言う。「アカデミズムには「体系化」や「分類」といった形の「成果」を過度に求める傾向があります。しかし無理矢理に結論付けると、それが現実に沿ったものではなくなることもある。特に文化は非常に政治性を



ゼミ風景。この時、皆で検証する題材として先生が選んだのが『The Return of Navajo Boy』。ウラン採掘によって、アメリカ先住民の居住地が汚染された事件を取り扱ったドキュメンタリー作品。

はらみやすいので、何らかの意図の混じった、現実にはそぐわない単純化から深刻な影響が生じる可能性もあります。私は、わからないところはそのままにする。ことも時には必要だと考えています。真剣な口調に、「文化を追究する」研究者としての矜持と、真摯な姿勢が表れていた。

現代社会の中で、共犯者にも犠牲者にもならないために

先生のゼミには、「アメリカ」で緩やかにつながりながらも、エンターテインメントや食文化、スポーツ、貧困問題など、多種多様なテーマに興味を持つ学生が集まっている。ゼ



先生が担当する『基礎演習』の授業風景。資料の選び方や論文の書き方などを初歩から学ぶことができる。

ミでは、まず日本語字幕のないアメリカのドキュメンタリー作品を研究事例としてゼミ生全員で検証していく。「作品の中に描かれている問題点を列挙して、理解を深め考察するためにどんな文献を読めば良いかを考えてもらいます。そして選定した文献を読み、論考をまとめて発表してもらいます。このような「作法」を学んだ後、各自興味を持つテーマの研究に取り組みます。」こうした作業を通じてアメリカ社会や文化について知見を深めるのはもちろんだが、先生の狙いはそれだけではない。「そこにどのような要素があり、作用し合って事象が成り立っているかを洞察する『文化理解力 (cultural literacy)』や、的確かつ批判的に情報を読み取り、問いを立てて論理的に考え、表現する方法を身に付けてほしいと思っています。」アメリカ文化に限らず、私たちが日常の中で接するエンターテインメント作品やアート、ニュースにも、何らかの意図が含まれている。その点に無防備でいるといつの間にか利用され、気が

ついたら共犯者になったり犠牲者になっていたりするリスクがある、と先生は言う。「けれどこうしたスキルを体得すれば、この社会を何とかサバイブしていけると思うのです。目指しているのは、『タフで俯瞰的・複眼的な視点を持つ人材』の育成です」

高校生の皆さんへ

この学部に進む学生は、「より良い社会をつくりたい」という素直な思いを抱いている者が多いようです。その気持ちはいつしか脇へ追いやりられてしまうこともよくありますが、ささやかでもいいから、心のどこかで大切に温めていてほしいと思います。私たちはこの社会の中を、交渉したり抵抗したりして渡り合っていきます。その時、「自分が何を大切にしたいか」が方向を定める手掛かりになる。それが「より良い社会」を実現するための行動に結び付くのではないかと思います。